

タイトル	ご退職記念号に寄せて：本城誠二教授をお送りする
著者	上野，誠治；Ueno, Seiji
引用	北海学園大学人文論集(64)：1-3
発行日	2018-03-31

## ご退職記念号に寄せて — 本城誠二教授をお送りする —

人文学部長 上野 誠 治

本学人文学部英米文化学科教授・本城誠二先生は、2018年3月31日をもって長く教鞭を取られてきた人文学部をご退職されることになりました。ここに先生の、長年にわたる学部および大学院に対するご功績に感謝の意を表する次第です。

本城誠二先生は、北海道大学大学院文学研究科修士課程でヴァージニア・ウルフを中心にご研究になり、修士課程修了後の1980年4月に本学教養部講師（英語）として着任されました。以来今日に至るまで、本学の英語教育の充実と発展のためにご尽力されました。1987年に教養部助教授となり、1998年には大学設置基準の大綱化に伴う教養部廃止により、共通教育・研究センター助教授とられました。その後、2001年の経済学部教授就任を経て、2007年に人文学部教授として異動されました。

ご専門は、アメリカ文学ですが、研究対象はその枠を越えて、映画・音楽へと広がり、それらを通して現代アメリカが抱える諸問題について論じておられます。その成果は多くの論文や著書に結実しています。ストリート・カルチャーから発したブラック・ミュージックの新展開であり、また都市の黒人が置かれている状況を伝え抗議する有効な手段ともなっているヒップホップについて論じた「ヒップホップという亀裂」（伊藤 章・編著『ポストモダン都市ニューヨークグローバリゼーション、情報化、世界都市』所収、松柏社、2001年）、1980年代を結節点として、そこから発する90年代と、そこに向かう60年代・70年代のアメリカ映画の地政学について論じた「ニューヨークと黒人映画のポリティクス」（同書）、南部ゴシック作家とされるコーマック・マッカーシーの国境三部作 The Border

Trilogy の二作目にあたる『越境』を分析し、主人公が犯す三つの越境が文明と自然、過去と現在、生と死が重層的に織りなされたボーダーを越えることであることを喝破した「聖なる野生と繰り返す越境」（松本 昇ほか・編『アメリカン・ロードの物語学』所収、金星堂、2015年）などが特筆に値します。とりわけ、近年刊行された『Crossing Borders —ジャズ／ノワール／アメリカ文化』（英宝社、2016年）は、自分と読者に向けて発信したブログに綴られたアメリカの映画・音楽・文学についての文章を再構成し一冊の本へと昇華させたもので、「アメリカ文学者による斬新なスピリチュアル・ジャズ論、フィルム・ノワール論」として高く評価されています。また、『二人の聖職者』（R・ポーシュ）、『夏の読書』（B・マラムッド）の翻訳もされています（平石貴樹・編『しみじみ読むアメリカ文学』所収、松柏社、2007年）。

教育面では、一般教育の英語科目（英語リーディングⅠ・Ⅱ、英語文化演習Ⅰ・Ⅱ）に加えて、学部の専門科目である北米文化論、アメリカ文化特論および基礎演習・人文学演習・専門演習、また大学院文学研究科では英米文学特殊講義・同演習なども兼任され、学部生・大学院生を大いに啓発して頂きました。行政面では、数多くの重要かつ多忙な委員を歴任され、さらに2010年4月から4年間にわたり教務センター長の要職に就かれるなど、人文学部はもちろんのこと、全学の発展のために大いに貢献されてきました。

学外にあっては、日本英文学会北海道支部の評議員や運営委員を長年にわたり務めるとともに、日本アメリカ文学会の代議員（2012年～現在）、同学会北海道支部事務局長（2006年～2011年）、支部長（2012年～現在）として、日本および北海道におけるアメリカ文学研究の進展に多大な貢献をされています。

最後に、私事になりますが、本城先生は私にとって、北海道大学文学部英語英米文学専攻および大学院文学研究科英米文学専攻の先輩にあたります。在籍期間が重なっていないため、直接の面識はありませんでしたが、武勇伝のいくつかは伝え聞いておりました。1988年頃の事だったと記憶

していますが、北海道内の各大学から教務委員や学生(部)委員が集う2泊3日の研修会があり、そこで初めてお目にかかりました。それがご縁になったのかどうかはわかりませんが、しばらくたってから突然お電話があり、北海学園大学に来ないか、とのお誘いを受けました。先年、一足先にご退職になった池内静司先生も私の先輩で、大学院時代に一緒に机を並べた期間があったため、よく存じ上げていました。その池内先生も当時すでに教養部で英語を教えられていたので、本城先生とも相談された結果、私が後任候補に浮上したのかもしれませんが。その後、教養部教授会の議を経て、1992年4月に、私は北海学園大学教養部に英語担当教員として赴任することになりました。人文学部が開設される前年のことです。

お二人とは、先輩後輩の関係にあったこともあり、以来、互いに「さん付け、君付け」で呼び合うことも多く現在に至っています。その後、教養部の廃止に伴って、いったんは別々の所属になってしまいましたが、既述のように、2007年に再び人文学部で合流することになり、大変心強く感じたことを覚えています。池内さんが去り、今回また本城さんが去って行かれることを思うと、寂しさが一入身にしみます。

敬愛する本城先生がご退職されることは人文学部にとっても、また私自身にとっても大変残念ではありますが、ますますお元氣でご活躍なさいますようお願いするとともに、今後とも人文学部の行く末を見守って頂き、折に触れて厳しい叱責と温かい激励をお願いする次第です。